第1問　次の例文の空欄に当てはまる言葉を選択肢から一つ選んでその記号を書き、その言葉の読みを記述しなさい。

例文

（1）メディアが一般民衆に［　　］する。
（2）民主主義と平和主義を［　　］する。
（3）重大な問題なので［　　］できない。
（4）先生は西欧の文学に［　　］が深い。
（5）彼の［　　］的な判断にみな振り回された。
（6）自分たちの状況を［　　］して確認する。
（7）出展する作品の制作に［　　］を凝らす。
（8）批判を封じるのは、彼の［　　］の手段だ。
（9）市の財政難が都市の再開発の計画に［　　］を来す。
（10）ぜひ［　　］のない意見を聞かせてほしい。

選択肢

（ア）俯瞰　（イ）言質　（ウ）耽溺　（エ）標榜　（オ）営巣　（カ）意匠　（キ）逡巡　（ク）造詣
（ケ）忌憚　（コ）稀有　（サ）齟齬　（シ）伺候　（ス）迎合　（セ）琴線　（ソ）常套　（タ）逆説
（チ）婉曲　（ツ）看過　（テ）挙措　（ト）恣意

第2問　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（注1）ガリレオの著書に『偽金鑑識官』（一六二三年）という本がある。『黄金計量者』とも訳されている。その中に次のような有名な一文がある。

哲学は、宇宙というこの壮大な書物の中に書かれてある。この書物は、いつもわれわれの眼前に開かれてある。けれども、まずその言葉を学び、それが書かれている文字が読めるようになるのでなければ、この書物を理解することはできない。それは数学の言葉で書かれているのであって、その文字は、三角形、円、その他の幾何学図形である。これらなしには、人間はその一語たりとも理解することはできない。これらなしには、①人は暗い迷宮の中をさまようばかりである。

ここで「哲学」とは、もともと知恵を愛すること、したがって学問の意味である。日本語の「哲学」よりはずっと広い意味がある。しかし、ここではとくに「自然哲学」、今日の自然科学にあたるものを意味している。その「哲学」は、これまで考えられてきたように昔の権威ある著者の書いたものの中に書かれてあるのではなくて、「宇宙という書物の中に書かれてある」のであり、しかもこの書物は「数学の言葉で書かれている」のであるから、従来のように、権威ある教説や伝統的な諸概念に従ってこれを読もうとしても、それは不可能である。このようにガリレオは主張している。

この一文は、宇宙と自然を研究するガリレオや（注2）ケプラーの新しいアプローチをよく言い表しているものとして、科学史の中でしばしば引用されてきたものである。ケプラーが、さまざまの幾何学的図形や整数比や音階までも使って宇宙の構造を解明しようとしたことや、ガリレオが落下物体について、単位時間に落下するiきよりは一に始まる奇数比一、三、五、七、……になることを見いだしたのは、この新しいアプローチの具体例である。これに対して、「形相因」とか「目的因」といった概念で自然現象を読み取ろうとしてきた従来の（注3）アリストテレスの説では、重い物体は、その目的地点である地球の中心に近づ

こうとして落下するのであり、そこに近づくほど速く落下するのであった。ガリレオに言わせれば、このような議論は「迷宮の中をさまよう」ものであった。

このガリレオの一文に関して、われわれはさらに二つのことを独自に考えてみるべきであろう。その第一は、宇宙を「書物」と見る見方についてである。日本の場合と比べてみると、日本の伝統的な思想・文化の中に、宇宙とか自然とかを、人間が読み取ることのできる書物のように見る見方は例外的にしか存在しなかったのであり、宇宙は「数学の言葉」で書かれた書物であるという見方は全く存在しなかったのである。日本にも和算と呼ばれるすぐれた数学があった。しかし和算は、西洋の数学のように論証的ではなかった。また、西洋の数学のように、宇宙や自然の現象を数学的にとらえて記述するというふうには使われなかった。こういう点から見ても、数学の言葉で書かれた書物として宇宙や自然を見る見方は日本には存在しなかった、と言わなければならないであろう。ところが、このような見方がとられたところに、②西洋における近代科学誕生の重要なポイントがあったのである。

第二点は、ガリレオの宇宙と書物との類比についてである。ここでガリレオは宇宙を書物一般になぞらえているのであろうか。決してそうではない。今日のように巷(ちまた)に書物がⅱはんらんしている時代ではない。グーテンベルクの活版印刷術発明から一世紀半しかたっていないこの時代、ただ単に書物といえば、それは『聖書』のことであった。英語で The Book とは *The Bible* のことであった。ガリレオは、③宇宙をその『聖書』になぞらえているのである。

このことは、筆者の単なる推測ではなくて、実はガリレオ自身の言葉としてはっきりと言い表されているところである。教会に行くといつも、会衆の眼前に大きな『聖書』が開かれてある。それと同じように、「宇宙という書物」も「いつもわれわれの眼前に開かれてある」。しかし、会衆がこの『聖書』を読もうと思っても、それはラテン語で書かれてあるため、まずラテン語を習得しなければそれを読むことはできない。それと同じように、「宇宙という書物」も「数学の言葉で書かれている」ので、まず数学を習得しなければこの書物は「一語たりとも理解することができない」というのである。

この類比がどこから来るかと言えば、それは、『聖書』が「神の言」であるのに対して、宇宙ないし自然は、その同じ神によ

って造られた「被造物」であるという関係からである。この意味で、宇宙ないし自然は、そこに神の業を読み取ることができる「第二の聖書」なのである。『聖書』と「第二の聖書」とは、語呂を合わせて The Book of Scriptures と The Book of Creatures というようにも言い表されてきた。The Book of Nature という言葉もよく使われる。ガリレオは、次に[iii]しょうかいする彼の著書『天文対話』冒頭のトスカナ大公への献辞においても、短い言葉で右と同様の見解を表明し、「哲学本来の対象である自然という大きな書物」の中でも第一に位するのは宇宙であると記している。

この「宇宙という書物」を「数学の言葉」で読み取って、その内容を誰にもわかるような言葉で書き表したのが④ガリレオの『天文対話』である。当時、学問的な著作はラテン語で書くのが普通であったが、ガリレオはこの書物をイタリア語で書いている。そこに、宗教改革との類比を見ることもできるのかもしれない。すなわち、ラテン語の『聖書』をルターが初めて自国語のドイツ語に訳したように、「数学の言葉」で書かれた「第二の聖書」の内容をガリレオは自国語のイタリア語で書き表したからである。

『天文対話』詳しくは『プトレマイオスおよびコペルニクスの二大世界体系についての対話』（一六三二年）は、イタリアの文学作品としても高い評価を得ている。ガリレオは古典の素養もあり、文章もすぐれている。われわれはとかく、科学と文学、理科と文科を正反対のものと考えてしまうが、『天文対話』に見られるように、科学は文学であり、理科と文科は不可分なのである。このことは、フランスのパスカルの著作などにもはっきり認められる。日本でも（注4）寺田寅彦の場合がそうであった。科学論文に言語上の配慮が不可欠なことは（注5）前節で述べたとおりである。この意味からも、また以下に述べるいくつかの理由からも、『天文対話』は、筆者がまず第一に勧める科学上の古典である。邦訳は岩波文庫に上下二冊本として収められている。訳は正確であるが、訳文に硬さがあるのが少々残念である。

『天文対話』は、この題名が示すように、対話の形で書かれている。対話に登場するのは、シムプリチオ、サルヴィアチ、サグレドという三人の人物である。シムプリチオは伝統的な（注6）スコラ学者で、プトレマイオスの世界体系とアリストテレスの自然学を[iv]しんぽうしていて、この立場からの議論を展開する。これに対して、サルヴィアチはガリレオの代弁者である。彼は

コペルニクスの太陽中心の体系と新しい科学のために弁じる。そして、サグレドは、知的好奇心に満ちあふれた素人の代表として、二人の対話・討論に加わってするどい発言をする。

三人が集まる場所は、イタリアのヴェネチア（ヴェニス）にあるサグレドの家である。対話は四日間にわたって毎夕行われるが、意見を異にするシムプリチオとサルヴィアチの間にサグレドが加わって、いったい何が真理なのか知ろうと熱心に求めている。ときにはユーモアを交えながら、知性と才気にあふれた活発な対話・討論が展開されていく。ただし、冒頭の部分をややこしいと思われる読者には、そこをとばして「第一日」の後半から読み始められることをお勧めしたい。

いったい地球が動くのか太陽が動くのか。それがこの『対話』の主題であるが、議論は、天文学のみではなく、広い範囲にわたって行われる。世界の見方、世界についての考え方にまで及ぶことなしにこの問題を論じることはできないからである。それゆえ、これを読んでいくとさまざまのことが見えてくる。

まず、近代科学はどのようにして生まれたのか。その本質は何か。それは人間のいかなる知的営みなのか。それはどのような方法で行われるものか。そういったことがらである。科学概論とか科学哲学の書物よりもまず『天文対話』を読むことによって、こういう問題についての具体的で身近な事項を感じ取ることができるであろう。

渡辺　正雄　著　「文化としての近代科学」株式会社講談社、二〇〇〇年、一八〇ページ～一八五ページ、一部改

（注１）ガリレオ……ガリレオ・ガリレイ。イタリアの物理学者・天文学者（一五六四～一六四二）。
（注２）ケプラー……ヨハネス・ケプラー。ドイツの天文学者（一五七一～一六三〇）。
（注３）アリストテレス……古代ギリシアの哲学者（前三八四～前三二二）。
（注４）寺田寅彦……物理学者でありながら、随筆や俳句などの作品も残した（一八七八～一九三五）。
（注５）前節……この文章より前の部分を指す。
（注６）スコラ学者……中世の西欧で、教会などの付属学校を中心として形成された哲学の総称である「スコラ学」の学者。

問一　傍線ⅰ～ⅴのひらがなを漢字で書きなさい。

問二　傍線部①「人は暗い迷宮の中をさまようばかりである」について、この内容を解説した次の文章において、空欄【　ア　】【　イ　】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【　ア　】は十五文字以内、空欄【　イ　】は七文字以内で答えなさい。

アリストテレスのような【　ア　】の中に書かれている【　イ　】を基に理解するという従来の自然科学には、限界があるということ。

問三　傍線部②「西洋における近代科学誕生の重要なポイント」について、この内容を説明した次の文章において、空欄【　ア　】【　イ　】【　ウ　】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【　ア　】は八文字以内、空欄【　イ　】は五文字以内、空欄【　ウ　】は十文字以内で答えなさい。

人間が【　ア　】は【　イ　】で説明可能であるという考えに至り、これを【　ウ　】ようになったこと。

問四　傍線部③「宇宙をその『聖書』になぞらえている」について、この理由を解説した次の文章において、空欄【　ア　】【　イ　】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【　ア　】【　イ　】はそれぞれ十五文字以内で答えなさい。

宇宙は【　ア　】という点で、『聖書』の由来に通じている。そして「宇宙」と『聖書』には、読むための手段を習得する必要があるという共通点や、【　イ　】という共通点があることから、宇宙を『聖書』になぞらえているのである。

問五　傍線部④「ガリレオの『天文対話』」について本文中で述べている内容として、以下の（ア）～（オ）のそれぞれの文が正しい場合には○、間違っている場合には×をつけなさい。

（ア）登場人物の三人が、それぞれ立場や意見の異なる学者であることで、真理を熱心に求めて知性と才気にあふれた活発な対話が展開されている。

（イ）理科と文科は分けられないものであることが理解できる著作であり、科学上の古典というだけではなく文学作品としても高い評価を得ている。

（ウ）科学概論や科学哲学の書物の後に読むと、近代科学の誕生や本質、行われる方法などについて、身近に感じて具体的に理解できるようになる。

（エ）ガリレオの時代は、学問的な著作をラテン語で書くという習慣が既になくなっていて、ガリレオもこれにならい自国語で書き表すことにした。

（オ）登場人物の三人は、天文学の問題を考えるうえで必要な、世界の見方や世界についての考え方にまで及ぶ広い範囲にわたる議論を行っている。

第3問　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

子供の心は無垢で、あるがままをより受け容れやすいが、子供にとって理解できないものがいかに多いことか。理解とは、外にあるものをそのままの形で受け容れることではなく、客として半ば出迎えて、しかるべき所へすえるのに近い。受け手にそれだけの用意がなければ、あるがままに読むことができないのはもちろん、そもそも何が何だかわからなくなってしまう。

作品も傍若無人にわれわれの心の中へ押し入ってくるのではない。様子をうかがい、いくらかおずおずと近寄ってくる。読み始めの本が、たいていいくらか抵抗を感じさせるのも、作品と読者の出会いの緊張を反映している。

具体的な表現を好む読者に対しては、作品はなるべく即物的なところを見せようとして、思弁的なところは抑える。つまり、できるだけ気に入られようとつとめる。それでも主人のお気に召さなければいたしかたがない。ご縁がなかったものとしてあきらめる。つき合いまで発展しない、ただの訪問に終わる。

迎える主人側も、なるべくならば気持ちよく客になってもらうための用意はする。しかるべく準備したり部屋や調度に気を配るであろう。そうして迎えた作品であるから、相手かまわず、勝手なことをまくし立てたり、粗略な扱いなどするわけがない。ときには下にもおかぬ（注1）鄭重なもてなしをする。

しかし、それは、あるがままをそのまま受け容れるのとは違う。客を接待するには対話が必要になる。口をきかない主人では困る。同じ客である作品でも、迎える主人、読者が違えば、話の調子、内容とも変わるのが当然である。作品の解釈が、ひとによって異なるのはそのためである。

これまで、読者は自らを作品という客を迎える主人と考えることがなかった。文学の理解においての多くの混乱が起こっているのは、読者が不当な自己否定をしていることと無関係ではない。

〝あるがままに〟読めない、となれば、読者はめいめいのよしとする見方によって理解するほかはなくなる。われわれがわか

ったと思うのは、そういう理解である。

外国語を知らない人にとって、その意味をとるには翻訳を必要とする。翻訳とは自国語で外国語の意味を近似値的にとらえようとする作業である。〝原文忠実〟などと言うけれども、翻訳に〝あるがままの翻訳〟というものはない。かならず、もとの表現との間にずれを生じている。原文を完全に再現することを求めるならば、翻訳は理論上は不可能になってしまう。これまでもそういう不可能説がおりにふれて提出されてきた。ところが、実際はさかんに翻訳が行われている。完全に忠実な再現でないからといって、それを禁ずることはもちろんできない。そういういわゆる翻訳をわれわれは何か特別と見なしがちである。多くの人は、ときに翻訳を手にすることがあっても、自分では翻訳の作業そのものとは無関係であると思っている。はたしてそうであろうか。案外、目に見えない翻訳はたえずしているのかもしれない。

作品を読む。そこに書かれていることがすべて読者の熟知した事柄ばかりということはあり得ない。かりに、そういう作品があればわざわざ読む必要もないし、もし読もうとしてもたちまち退屈を感じて投げ出してしまうであろう。

未知の問題があらわれれば、読者は想像力をはたらかせて、何とかわかろうとする。わかったと感じることができれば、そこで、一種の〝翻訳〟が完了しているのである。自己のシステムによって未知の他者を再編成するのが翻訳ならば、ものを読むのは、大なり小なり翻訳的である。理解ということそのものが翻訳的性格をもっている。完全理解ということは言葉の上でしか存在しない。どんなに忠実なように見える理解でも、かならず理解側のものの見方や感じ方、（注2）先入主などが参加し、その影響を受けているものである。ごく簡単な表現についても、こまかく見るならば、読者の数だけの違った解釈が生まれるのは、理解が翻訳であることを何よりも雄弁に物語っている。どんな名手でも、同じ原文からできた二人の翻訳がまったく同じということは決してない。もし部分的にでも完全に同一の訳文があれば盗作を疑われるくらいである。

もちろん、読むだけでなく、話を聞く場合にも、同じような翻訳的理解がおこる。というよりもむしろ、口頭伝達における〝翻訳〟の方がものを読むときの〝翻訳〟の原形であり、それだけにいっそう異同も大きい。

世間の好奇心を刺激するような〝ここだけの話〟が、たちまち尾ひれをつけて泳ぎ廻り出し、しばらくすると、はじめの話し

手が腰を抜かしそうなデマになってしまう、という例はいくらでもある。話をリレーする人たちに、すこしでもおもしろく、大げさな噂（うわさ）になればいいという気持ちが潜在している。ひとりひとりの受け手によって〝翻訳〟を受けるたびに、そのように変形され、ついには似てもつかない話を生み出す。

世の中には初めからおもしろい話というものもないではないが、多くは、理解する側でおもしろいと感じたものが〝おもしろい〟話になる。〝翻訳〟された結果である。かりに、もとはおもしろい話であっても、〝翻訳〟しておもしろくないものは、おもしろくなくなってしまう。

おもしろいと思うときはたいてい、〝翻訳者〟は自己の考えや感情を対象の中へもち込んで相乗効果を出している。技術的翻訳から見るといささか誤訳くさいときに、むしろ、おもしろさが感じられる。数学の教科書を読んでもおもしろくないのは、そういう勝手な〝翻訳〟が許されないからである。

（注3）六法全書も、数学の教科書ほどではないにしても、ここで考えているような自由な翻訳的理解の対象になりにくいものだが、それでもなお、法律の条文がただ一つだけの解釈しか許さないのではない証拠に、法解釈ということが裁判における重要な争点になる。原告と被告は同じ法律の条文について、対立する翻訳を主張し合っているようなものだ。

古典作品を読むと、ところどころに、諸説紛々として定まる所を知らず、と言いたくなる難所に遭遇する。考えてみると、これまで出されたどれも正しいとも言えるし、逆に、どれも不満足で、別の自分の考えの方がいいようにも考えられる。

どうして、こうした諸説紛々の箇所が生まれるのか。考えてみると、おそらく原文に、ある裂け目ができていて、読者、研究者の〝翻訳〟がその裂け目から顔をのぞかせるのだと考えることができそうだ。読む側の〝翻訳〟は原文のすべての部分に対してなされているが、普通のところでは、大同小異の理解になって誤差が表面化せず、潜在したままになっている。それが原文の乱れや裂け目につき当たると、各人の〝翻訳〟の差がはっきりした形をとるようになる。それが諸説紛々の正体である。

このように考えてくると、理解はすべて目に見えない翻訳であることが認められるようになるであろう。

諸説紛々の箇所は、われわれが翻訳と思わずに翻訳をしていることをはっきり示してくれるが、それ以外にも目に見えない〝翻訳〟がないわけではない。

いま仮に、ある作品の（注4）テクストに対して、ひとりの読者がこれに不満をいだいたとする。そして新しいよりすぐれたテクストを作ろうとしたとする。乱れた本文を正そうという意図がはっきりしているときには、このテクストの再建は校訂と呼ばれる。あまりに勝手な翻訳が多くなって、原文の姿が消えてしまったとき、その原文へ返ろうとするもので、いわば、翻訳から原文へ戻ろうとする翻訳、逆翻訳である。

とにかく、まったく同じという新しいテクストはできない。どれほどもとと同じようにと心掛けてもなお、かならず異同ができる。印刷上の誤りをなくするために校正が行われるけれども、完全に誤植をなくするのは至難である。すべての新版は（注5）異本ということである。その異本は広義の翻訳の結果として生まれるものにほかならない。

『源氏物語』の現代語訳はりっぱな翻訳であるが、漱石全集が若い読者に読めなくなったというので（注6）新仮名づかいの新版が出来たのも形をともなった翻訳にあらざる翻訳の一種である。

本文そのものには改変を加えないが、その周辺において、本文にも影響を及ぼすのが註釈である。もともと、作品の本文には註釈などついていないものだ。註釈を付けようとする仕事は、本文の理解に当たって生じた抵抗のエネルギーによるもので、後の読者の便にという意図をもっている。やはり、形をかえた翻訳、異本としてよかろう。

昔の人は原本を写して写本をこしらえた。一字一句間違わないようにと心掛けても、なお、いろいろな異同ができる。同一作品の写本間にいちじるしい出入りが見られるのも、写本といえども、やはり翻訳であると考えれば、説明がつく。決して同じものはくり返されない。くり返されたものはかならず異同を生じる。翻訳たるゆえんである。

作品を読むという〝翻訳〟が、テクストの変動をともなったり、諸説紛々の註釈を生んだりすることはむしろ例外と考えられる。読み手の行っている大部分の翻訳はそういうはっきりした形をとらないで読者の頭の中に留まったままでいる。各人のもつ作品像、解釈は翻訳を経た上の異本であることを改めて認識すべきである。それを〝あるがまま〟の作品の姿と誤解するところ

から混乱が生じてくる。

外山滋比古　著「外山滋比古著作集－異本と古典」株式会社みすず書房、二〇〇三年、七六ページ～八一ページ、一部改

（注１）鄭重……「丁重」と同じ。
（注２）先入主……先入観。
（注３）六法全書……憲法・刑法・民法・商法・刑事訴訟法・民事訴訟法の六つの代表的な法律について、法令を広く集めたもの。
（注４）テクスト……書物の本文。
（注５）異本……もとは同一の原典であるが、伝承の過程で異なった部分が生じた本。
（注６）新仮名づかい……現代仮名づかい。

問一　筆者によると、「理解する」とはどのような作業か。80文字以上100文字以内で書きなさい。

問二　作品を読むということについて、筆者の主張を380文字以上400文字以内で要約しなさい。